

北海道における猛禽（鷲・鷹・梟）類の保護

— 新たな段階へ向けて —

竹 中 健

たけなか・たけし
シマフクロウ環境研究会

要 旨

シマフクロウの保護の歴史を鑑みると、希少猛禽類を保護するためには研究の蓄積、保護に対する共通認識、保護を検討するシステムの三つが重要である。特に検討システムは重要であるが、シマフクロウ以外の猛禽類では導入されていないことから行政への働きかけが早急に必要である。

一、はじめに

北海道が蝦夷地と呼ばれていた頃、この地はまさに猛禽類の宝庫であった。江戸時代から明治初期にかけての文献を紐解くと猛禽類に関する記述が随所に見られる。鷹狩に利用されたオオタカやハヤブサなどタカ類や、矢羽の材料として珍重されたワシ類の尾羽は蝦夷地の重要な物産で、松前藩とそれらを実際に山野で採取するアイヌの貴重な収入源になっていた。また、万物霊長を神とあがめるアイヌに、シマフクロウがコタンコロカムイ村の神として特に大切にあげられていたことはよく知られている。

明治の北海道開拓が始まって一〇〇年と少し経った現在、猛禽類は「希少」という形容詞を伴う存在となってしまった。わざわざ解説するまでも無かるが、猛禽類が希少生物になってしまったのは生息可能地が激減したからに他ならない。例えばシマフクロウで言うと、シマフクロウは魚食性で大木の樹洞に営巣し大きな行動圏を持つために、生息するためには魚類豊かな河川と壮齢林が大量積む必要である。しかし開拓以降、特に平地から丘陵地にかけての森林はほとんどが農地が変わっ

てしまった。面積的な変化だけではなく、戦後は環境の質も激変した。河川改修が急速に進み、ダムや落差工が建設され、サケマスが河口部で完全に捕獲され、上流の水源地は孵化場や養魚場、浄水場で占められた。その結果、北海道の河川の魚類資源量は激減した。そして山地に残された森林は洞爺丸台風を契機にして大規模な伐採が始まり、また、中山間地では大面積皆伐とカラマツ植林が行われたため、今では北海道には伐採履歴のない広葉樹林や針広混交林の壮齢林はほとんど無い状態にまでなってしまった。これら環境の改変は時間をおいて徐々に行われたものではなく、同時多発的に短時間に大面積で行われたため、個体が環境変化に適応する時間がなく一気に生息数が減少したと思われる。シマフクロウだけではなく、猛禽類の多くは同様の環境改変により希少化したと考えてよいだろう。

二、現在の問題

猛禽類の保全がクローズアップされ始めたのはかなり最近である。全国各地のダム建設や道路建設の自主アセスメント調査結果に対して、生物への影響の解釈をめぐる各地で論争が起り、食物連鎖のトップに立つ猛禽類は象徴的な種として扱われるようになった。この動きを受け、一九九七年に環境庁により「猛禽類保護の進め方」がマニュアルとして提出され、環境アセスメント法も施行されたことにより、それまでは一般鳥類センサスしか行われていなかったアセス調査に猛禽類の調査項目が加わった。本州の動きが波及して北海道で猛禽類のアセス調査が本格的に開始されたのは、確か一九九五年前後だったと記憶して

いる。

しかしながら、アセスマントが実施され始めてから猛禽類の状況が好転しているとは言いがたい。むしろ混沌としてしまった。特に最近気になるのは、アセスマント調査が進むにつれてオオタカやクマタカなどが確認される機会が多くなり、現場観察員から「オオタカやクマタカはどこにでもいる」的な発言が出るが多くなってきたことである。だがその根拠を聞くにあやふやな答えしか返ってこない。また猛禽調査のプロと称する方々がそれぞれ独自の経験や印象で猛禽を解釈しており、専門家間で解釈が食い違うことがしばしばである。これは結局のところ猛禽の評価があまりにも経験的な断片的情報に偏りすぎ、同一個体の長期にわたる研究観察がなく、また科学的なデータ採取法や解釈手法をとっていないことにより起こっていると考えられる。現状のように不確定要素の大きすぎる希少猛禽類を議論する場合には、基本的生態、推定分布域、推定個体数、必要とされる環境容量などがわからないうちは、相当安全圏を取って判断しておくべきであろう。安全圏を取りながら十年間ほどきっちり科学レベルで調査研究を重ねれば、かなりの部分が明らかになるはずである。

さらに大きな問題は、クマタカなどは保護に対する一般の関心が非常に低いことである。熱心なウォッチャーを時々見かけるが、全体的に数が少なく、また保護に対してもさほど関心が無い人が多い。行政も例えば環境省は猛禽類保護マニュアルを出しただけで、特に現状に対して関心があるようには見えない。

クマタカでは残念ながら、研究、保護をすると



〈感電防止バーにとまるシマフクロウ〉

いう共通認識、保護のシステム、のいずれも不十分であると言わざるを得ない。

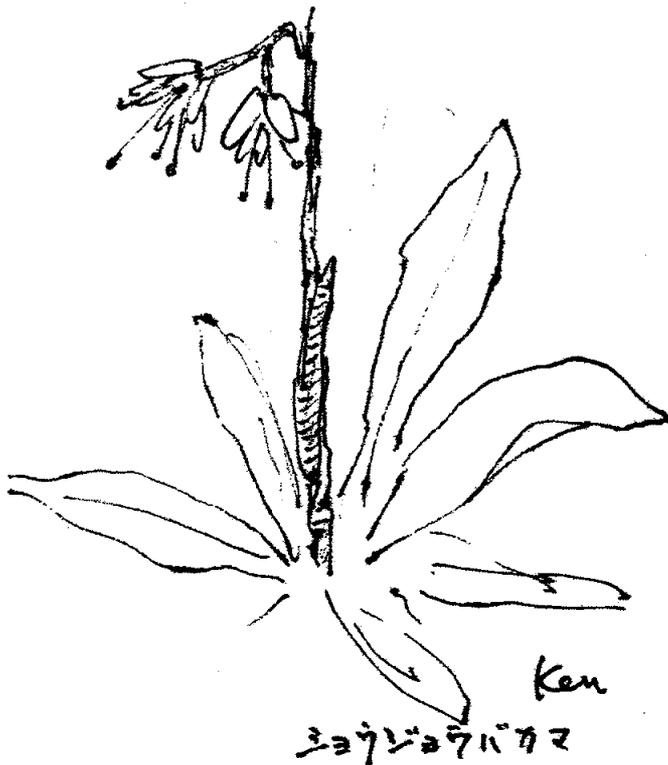
三、シマフクロウ保護

ここでは完璧にはほど遠いが、まだ他の猛禽類に比べてマシなシマフクロウの状況を具体的に示してみよう。これが他の猛禽類保護のヒントになると思う。

シマフクロウのフィールド研究者は現在三人おり、根室の山本純郎氏、現在十勝在住の早矢仕有子氏、そして札幌在住の私、竹中健である。この三人はシマフクロウへのアプローチがそれぞれ違う。山本氏は二十年前に巣箱架けやシマフクロウの給餌を始めてシマフクロウ保護の先鞭をつけ、以来根室の複数つがいの観察、保護個体の飼育、人工孵化などの研究観察や普及活動を行っている。早矢仕氏は北大大学院から十五年間、十勝地方の特定家族を研究観察し、特に○○○カメラを用いた繁殖生態調査や電波発信機による行動圏調査をいち早く導入し科学的成果をあげてきた。最近は国有林と協力して人工林から自然林への転換事業に取り組んでいる。お二人は定点における研究と保護に主体を置いていて、私は全道を対象に分布調査とモニタリング、生息地の環境定量化と比較を主眼にし北大大学院から十二年間研究を行っている。シマフクロウの知見に関しては、データの取り難さと保護上の問題が障害になって、現段階で発表できていない論文が少ないが、関係者間で交換している科学的知見と蓄積は膨大である。現存するシマフクロウのかんりの割合の定着生息地が明らかにになっており、推定数(一二〇十)が精度高く示されている。シマフクロウの繁殖生態や

生活史は多くの部分が科学レベルで明らかになってきており、生息に必要とされる環境容量についてもある程度のラインが提示できてきている。各生息地の状況についても把握が進んでいる。おそらく日本に分布する動物の中でも最も野外での生息や生息状況が分かっている生物のひとつである。いっぽう、行政レベルでのシマフクロウの保護は、一九八〇年代から環境庁によりシマフクロウ保護増殖検討委員会が設置され、山本氏や学識者のアドバイスのもと巣箱架けや給餌事業、個体への標識事業を実施してきた。

一九九〇年代ならば竹中と早矢仕もオブザーバーとして会議に参加し、林野や道庁も会議に参加することから生息地の様々な問題を具体的に科学的に議論する貴重な場になった。また、生息地の情報などを適宜提供することによって、各種開発や森林伐採を事前回避できる事例が増えしてきた。環境省が



繋ぎになって専門家と行政各局の情報交換が比較的スムーズになったのである。

そしてなんとと言ってもシマフクロウの保護の大きな味方は国民である。シマフクロウが見栄えだけの人気ではなく、希少性や原始の森を代表する生物だと認知されるようになったが故に、「シマフクロウは大切である」という保護の共通認識ができあがっている。

このようにシマフクロウは、検討材料としての基礎知識、保護に対する共通認識、それらを検討するシステムがある程度整っている。それゆえ、何らかの問題が発生した場合に具体的に対処しやすいことが多いのである。

と、良い面ばかりを書いたが、ここまで来るのはイバラの道だったということは強調しておかなければならない。黙っていて出来上がった形ではない。また現実にはうまく行っていないことが多いのも事実である。例えば下世話なことを言えば、我々フィールド研究者の研究資金はもっぱら自己資金と助成金、寄付金である。また誰からも給料をもらっていないので生活費も別に稼がなければならぬ。我々を支えているのは情熱と専門家としての責任感だけである。この不安定な状況はすぐに研究や保護の断絶に繋がる危険性ははらんでいるため、将来にわたって科学的保護のレベルを維持できるか不安である。また、最近の環境省のもっぱらの関心は飼育個体群の充実と野外からの個体の確保、飼育後の放鳥にあり、個体を飼育下に置くよりも行政は生息環境の保護に重点を置くべきである、とする我々野外研究者と意見がすり合わない。システム面では数年前に環境省のシマフクロウ検討会の組織構成が変わってしまったと早矢仕氏が直接環境省以外の行政各部署と公式の場で意見交換する機会がなくなってしまった(改善を要望中)。また、現在はこれらの検討会議(改善を要望中)の中身が非公開で、現段階では保護のためにはそうせざるを得ないが、本質的には保護に支障をきたさない範囲で専門家や行政の議論を国民に公開する必要がある。さらに国民の人氣が高い反面、相変わらず傍若無人なカメラマンやバードウォッチャーが後を絶たず、またインターネットの普及によって様々な情報が漏洩し始め、生息地へのプレッシャーはますます増えている。

四. これからに向けて
シマフクロウの保護の歴史が示すように、希少生物を保護する王道は、科学的で必要かつ十分な知見の蓄積、保護に関する基本認識、保護を検討するシステム、の三つの整備である。実際問題としては、保護を検討するシステムが一番重要である。良好なシステムが無ければいくら研究や知見蓄積が進んでも有効に利用されることはないし、また研究蓄積が進むのを待っていないといつまでたっても保護に着手できないからである。また、保護に関する基本認識や価値観は時代や地域の背景により変化することに注意しなければならない。ある地域では「オオタカはどこにでもいる」かも知れないが、だからといってオオタカが珍しかったり減少したりしている地域で同じように考えてはだめなことは自明である。釧路の人にとっては湿原は珍しくないが、石狩平野では実に貴重な存在であるのと同じである。結局、猛禽類の重要性を判断するのは地域の一般市民であるから、市民へ正確な検討材料を与える必要がある、そうしたことも保護を検討するシステムが無ければ始まらないのである。また、シマフクロウをはじめ希少となってしまった猛禽類の状況を改善するためには、どうしても生息地の確保という難しい課題の議論を避けては通れない。科学的知見で環境容量を示し、技術的に環境復元のめどが立っても、肝心の生息地の確保ができれば意味はない。このような難題にこそ保護を検討するシステムが重要で、

様々な知見や背景、将来ビジョンを、様々な立場の人々や組織が民主的に議論できる場があれば、猛禽類の保護のみならず自然保護全体が大きく進むに違いない。

最後に自分勝手な立場からいくつか言わせてもらえば、まず、どんなアマチュアもアセスメント業者も少しずつ科学的なレベルを上げていってほしいという希望がある。科学的な手法で得られた情報はたとえ断片的なものであっても必ず役に立つし、議論が冷静に行えるからである。いっぽう、大学などでは講義で保護に関する議論をきっかけして頂きたい。せっかくの科学的思考と技術を持った多くの学生が有効利用されていない現状は実に歯がゆい。また、自然保護に関わる人々や行政機関は、若手の研究者や学生研究者に発言の機会を与えるなどサポートを強化して頂きたい。最近の研究レベルの進歩はすさまじいが、最新情報を知り、ナマに近い場所にいるのが大学院の学生であったりする。私自身が院生時分に多くの人のサポートを受けてきて、研究と社会の繋がりを肌で感じ、それが対象生物や研究に対する責任感を培ってきたと言っても過言ではないからである。終わりに、上で示した保護検討システムの導入の早期実現を行政に働きかけて頂きたい。市民からの要望が多ければ多いほど実現のスピードは速い。猛禽類の状況は決して楽観できる状況にはないものである。